

大 学 図 書 館 問 題 研 究 会 京 都

〒607 京都市山科区大宅山田町34 京都橘女子大学図書館 小林倫道気付
(Tel) 075-574-4118 (Fax) 075-574-4124

L I S A II に 参 加 し て 一 天 文 学 に お け る 図 書 館 と 情 報 サ ー ビ ス

(*)

池村 奈津子

* Library and Information Services in Astronomy II (ESO, Munchen, Germany)

天文学関係の図書館職員・研究者・出版関係者が5月10日から12日までの3日間、ドイツ・ミュンヘンで開かれた「天文学における図書館と情報サービス(LISA II)」のワークショップに参加した。このワークショップは国際天文連合(IAU)、アメリカ天文学会(AAS)、専門図書館協会(SLA)を初めとして、出版社、天文台、研究所、有志など多くの団体や個人の支援のもとで開かれた。アメリカからの参加者24名、ドイツ18名、フランス15名、イタリア14名が二桁参加で、日本からは3名が参加した。総勢26ヶ国から130人程が集まり、3日間のぎっしり詰まったスケジュールに疲れる事もなく熱い議論を展開した。日頃仕事上かかわりの多い国立天文台図書室、東大天文教室図書室、そして京大宇宙物理学教室図書室では、職員として今まで「天文の図書室」について積極的に話し合うことは無かったが、このワークショップに参加する事でいろいろな問題を考えるきっかけとなった。私の参加理由は、1)このワークショップ "LISA II" が図書館職員を中心として取り組まれた事に対する興味、2)世界の天文図書館職員の発表を聞いて大いに刺激を受けるのではないかという期待、3)願わくば国立天文台が中心となり、日本の天文関係図書室の連携が更に深まる事への期待、の3点にあった。

第一回目のコロキウム "LISA" が1988年にアメリカ・ワシントンで開催され、国際天文連合の110回コロキウムとして位置づけされていた。このコロキウムは天文台や天文研究所の図書館員が日頃の問題点を議論し合う事、そして、異なる国々の図書館員達がより一層の協力と刺激をし合う機会を持つことを目的として開かれた。そしてその時の多くの参加者から、コンピュータや通信ネットワークを用いての新しい発展に対して大きな注目が置かれることとなった。

京大宇宙物理学教室図書室では1988年頃は当然「紙」の出版物が中心だったため、このコロキウムの報告書の中から、プレプリントの整理方法とか他の図書館の活動とかを参照にしながら仕事に役立てていた。その後、図書室ではビデオやCD-ROMを受け入れるようになり、京都大学でも学術情報センターのデータが各図書室の端末機から検索出来るようになってきた。また、研究室のパソコンからも学情にアクセス出来るようになる

など、日常業務の中にコンピュータが少しずつ入り込んできた。電子メールを使って図書業務の一部を行うようになり、一步一步情報化に向かって進んできた。雑誌等にはインターネットや電子出版の記事が載るようになっていた。研究者サイドでは計算機センターなどとつながり情報検索などを行い、頭の中だけはその情報化の波を受けとめてはいたものの、現実の図書室におけるデータベースの検索はそれほど急進展はしなかった。

そして、この第一回の“LISA”から7年目に開かれた今回の“LISA II”は、まさに情報化の時代、コンピューターの時代を感じさせるものだった。ここ数年に驚くべき速さで図書業務が変わりつつあるのを実感した。

“LISA II”のプログラムを覗いてみるとInternet(Telnet、FTP、E-mail)、WAIS、WWW(The World Wide Web)、SIMBAD、Electronic Publishingの言葉が目立つ。もはや世界の大学・研究所の図書館はWWWでの情報検索が主流になっていた。ここでは全ての発表の報告は出来ないが、主なものをいくつか紹介したい。

『図書館員のためのインターネット：The Internet for Librarians』（ESO図書館 Uta Michold）今回のワークショップの世話人でもあり、素晴らしくてきばきした報告。

インターネットは情報伝達的手段として電子資料に個人が直接アクセスすることが出来る。インターネットを使う人は情報の供給者でもあり同時にまた利用者でもある。そしてこのサービスは個々人のイニシャティブによってその有用性が発揮される。基本的なインターネットの機能としては、電子メール、電子掲示板、メールリスト、ファイル伝送、遠隔ログインなどがある。電子メールは図書館員としての情報の交換や伝達、そしてサービスの向上のために有用である。電子掲示板はメールを個人に発信せずに、ある掲示板に張り付けておく。そして利用者は自分に必要な掲示板をパソコンを通して見ることになる。メールリストは複数の相手に対して同時に情報を流すときに用いられる。TELNET（遠隔ログイン）はtelnetコマンドの発行により国内外の図書館やデータセンター等に直接アクセスすることが出来る。telnet 140.147.254.3 は議会図書館へつながるし、またtelnet libhost.hq.eso.org はESOの図書館へ、telnet melvyl.ucop.edu はカリフォルニア大学へとパソコンの前に座ったままつながることになる。そしてつながった情報を取り入れるためにFTP（ファイル伝送）を行い、手元のプリンターから出力する。更に発展したインターネットにはWAIS（Wide Area Information Servers）やWWW（World Wide Web）がある。マウスをクリックする事により全般的な情報から具体的な情報まで自由に得ることが出来る。

これらの電子メール、メールリスト、電子掲示板などの機能は日本でも学術情報センターの端末で既に利用されている図書館職員が多いと思う。telnetに関しては、以前「インターネットの使い方」という記事を読んだ時、図書室から一度試してみた。カリフォルニア大学に入り込んだことが理解出来た時の驚きを今も覚えているが、それが実際仕事の面でも大いに役立つ時が近づいてきた。

引き続きこの『WWW』（カナダ—フランス—ハワイ望遠鏡 Liz Bryson）の具体的な報告があった。図書館員のLizが、彼女のホームページを作って楽しく報告した。

利用者が何をどのように知りたいか、何処にどのような情報があるか、例えば天文関係者の名簿とか関連分野の機関とか、勿論、カタログ、データ、雑誌、抄録、ニュースなどを研究室や図書室に居ながらにして手に入れることが出来る。まさに「情報ハイウェイの

地図・リズのホットリストとトラベルガイド」と名付けられたパンフレットそのものであった。このWWWを通して SIMBAD (Set Identifications Measurements Bibliography Astronomical Data) というデータが効率よく利用できる。SIMBAD とは天文データ及び書誌の専門データベースであり、研究者には非常に役立つものである。研究対象のキーワードを入力する事により、それに関するあらゆる情報を取り出すことが出来る。引用文献からカードを調べ現物に当たり、ページを繰り論文を探し、また引用文献を見つけて再び現物に当たる、という一連の作業を画面の中で順にクリックする事で情報を得ながら進めて行ける。現在、大学では情報検索にコマンド発行による INSPEC が利用出来るが、WWWでは画面上で目で確かめながら進めるという点で非常に理解し易く検索も広がってくる。SIMBAD には天文のデータベースの最新情報をはじめとしてあらゆる情報が入っている。

「シリウス」と入力するとその星の性質からデータまで出てくる。関連誌も入っている。また、ADS (Astrophysics Data System) は著者、キーワード、対象、タイトル上の単語を入力することにより、多くの情報を得ることが出来る。

このように工業の時代から情報の時代に環境が変わってきた中で、図書館員として何処までかわっていくか。『変わり行く図書館員の役割—図書館での新しい科学技術の管理運営』(テネシー大学 Jose-Mrie Griffiths) のようにサービスのあり方を考える必要が出てくるのではないだろうか。これからの図書館はこのWWW等を用いているいろいろな場所の資料にアクセスし、情報を得ようになるだろう。道具や科学技術を用いることにより、利用者と知識の情報源とを結ぶ役目、仲介者の役目をする事になる。情報の専門家としては多くのものを要求されてくるが、ここに障害もある。デジタル化された利用可能な書籍の不足、必要とする情報内容を支える支援体制の不足、利用者教育と意識の不足等が報告された。これからは利用者の教育、訓練をする事によりアクセスの技術を磨くことも必要とされる。現実的にまだ、物理的な資料、場所を必要とする利用者が多い中で、情報化に向けて進むには図書館員は非常に多くのことを要求されてくる。

最終日の各発表が終わってから図書館員の役割に関して興味ある報告があった。まず図書館の概念が、受け入れる資料の形から4つに分類された。1) 伝統的図書館：印刷された資料を受け入れ、地域の利用者が開館時間内に利用する図書館。2) 機械的図書館：印刷された資料と電子の資料を受け入れる図書館で、地域のオンラインカタログや他の地域のデータベースを用いることが出来、CD-ROMや機械的な受け入れなどを行っている図書館だが、開館時間内に利用する。3) 電子図書館：ネットワークされたデータベースやカタログをいつでも何処でも利用できる図書館。4) デジタル図書館：電子の資料のみで、利用者はいつでも何処でも直接必要な資料にアクセス出来る。そして、情報化により図書館で起こりうる問題点も多く出された。増大する仕事量、知識不足、印刷物や電子出版物のコストの問題、ハードウェアのコストの問題等である。

そして、さらには図書館員の役割の問題がある。これからの時代、図書館員は消滅するのか、電子出版物の狩人になるか、インターネットの案内人になるのか、それともインターネット・ハイウェイの警察官か、監査官か、調整人か・・・。

こうした情報化の進む中、一方、経済的に恵まれない国の図書館員達のパネルディスカッションも行われた。ロシア、インド、中国、アルゼンチンからの図書館員がそれぞれの問題を訴えた。図書館でコア雑誌さえ十分に揃えることが出来ず、ある館で購入したもの

